

1-5

演題 摂食困難事例をふりかえって

副題 ～新型コロナに感染した利用者様の回復まで～

食事

新型コロナ

法人名 社会福祉法人 祥風会

施設名 芳徳の郷ほなみ

発表者名 鈴木 苗緒美
(職種) 介護職員

共同発表者

共同発表者

共同発表者

共同発表者

都道府県 神奈川県

住所 小田原市栢山 3565

TEL 0465-39-2231

FAX 0465-39-2230

メールアドレス honami@shofukai.com

URL https://shofukai.com/

今回の発表施設 またはサービスの 概要

歴史情緒豊かな小田原の市街地に位置し、静寂の中に活力のある栢山の地でのびのびと生活して頂く事を理念としながら、個室ユニット型特養として 90 名の方々を、明るく家庭的な雰囲気の中で日常生活が送れるよう支援しています。

研究の目的、PR ポイント

■研究背景・目的

新型コロナウイルスのクラスター下で摂食困難となった利用者のケアを 4 か月間行った。その中で挙げた以下の課題の解決に取り組んだ。

1. 摂食困難となった原因の究明
2. その他の背景要因の洗い出し
3. 行ったケアの評価
4. どのように今後に活かせるのか

■研究の価値性

通常、寛解までは様々な取り組みがなされるが、本研究は回復後にケアを振り返り省察・評価したという点に新規性を挙げる。また、その振り返りが、対象利用者への理解の深化とその後のケアの改善、感染症の集団感染への備え意識の醸成、ユニット職員の知識・技術の向上へつながった点で有効性があると考えられる。さらに、新型コロナウイルスという新たな疾病の一症例を提供するとともに、それに対するケアの一例も示す。

取り組んだ課題

具体的な取り組み

■対象利用者

96 歳、女性、食事形態 常食、平均摂取割合 90%、2023 年 1 月新型コロナ陽性

■取り組みステップ

1. 状況の把握

介護ソフトから種々のデータを取り出し、エクセルの表やグラフにまとめ、摂食・摂水の落ちていた期間と症状を把握。食事量は 3 割、水分は 7 割まで落ち、元の水準に回復したのは 4 か月後だった。また、症状は疲労感・倦怠感が 4 か月、食欲不振が 3 か月、嚥下困難や吐き出しが 2 か月半続いた。

2. 4 か月間のケアと経過の振り返り

3. 原因の究明

国際生活機能分類（ICF）をもとに、コロナ罹患前後の利用者および周辺環境の変化を確認し、そこから摂食・摂水困難となった原因を考えた。原因

として、①新型コロナと対象利用者の持病や体質との連動、②生活不活発病のリスクの上昇、③食事介助する介護職員の個々の技量が重要となる状況だったことを挙げた。

4. ケアの評価と今後へ向けた取り組み

摂食・摂水困難となった原因の考察とケアの評価を受け、次の事を行った。

- ① ユニット内でのフィードバックと、利用者の身体状況や生活への希望の再確認
- ② 今後のケア方針の検討と実施
- ③ 研究結果を施設内でシェアし、感染症の集団感染への備え意識を醸成

活動の成果と評価

■ 2 年経過時（2025 年 4 月）の対象者の摂食状況食事摂取割合 86%、食事形態 刻み食＋高栄養ドリンク、自立度 半介助

■評価

認知症の進行により完全な自立摂取は難しくなりつつあるものの、摂取量はコロナ罹患前とほぼ同じ水準を保っている。食事形態はコロナ寛解時のミキサー食からひとつ戻した刻み食を摂っている。以上の成果から、本取り組みは成功したものと言える。

今後の課題

本取り組みが成功したので、他の利用者に対しても同様の試みを行っていききたい。また、多職種連携を更に進め、研究の全段階で看護師・栄養士との協力体制を築きたい。

参考資料など

“国際生活機能分類（ICF）”.World Health Organization.

<https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/42407/9241545429-jpn.pdf?sequence=313&isAllowed=y>